映像表現で見られる武士道精神の時代性に関する考察
～二本の『十三人の刺客』を比較する

Consideration on Time Characteristics in the Film about Bushido-spirit
~ Comparison of two Films, “Jusannin no Shikaku” (1963, 2010)

クリストファー・リン
Christopher LIN

崇城大学大学院芸術研究科デザイン専攻
Division of Design, Graduate School of Art, Sojo University

Ⅰ　はじめに

精神の概念には、一つの国や地域の人々の思想である。それは、長い時間をかけて積み重ねられた文化の一部である。親や先輩の教え、育った環境の影響、幼い頃から自然に染み込んだ思想概念、倫理と道徳などを含め、多くの人が認める共通の価値観ともいえる。アジア地域には、華夏文化の儒釈道を中心にすえた、「五常」、「八徳」、「四維八徳」などの思想がある。ヨーロッパ地域には、民族の精神の一つ「騎士道」が存在している。他の地域にも多数の精神が存在している。いずれも地域の文化と歴史に沿って、長い年月をかけて育まれた民族精神である。現代社会は、経済的な国の発展を求めている。一方、人々の倫理道徳の欠如が問題になってきている。今後、文化精神を後世に伝達していくことが重要であると考え、民族の精神として人間社会において大切に受け継がれていくべきものである。本研究は同様に日本においては代表的な精神概念の一つとして武士道があげられる。武士道精神は時代の変遷によって、社会に受け取る変容を考察する。

メディア技術の進歩が著しい現代、メディアの種類が増えるにつれて表現手段が増え、抽象的な精神概念を表現することが以前より可能になった。ここで映画のメディアを取り上げ、研究の資料として研究を展開する。映画は、芝居、音楽、服飾、照明、背景、映像など、複数の要素を含むメディアである。映画は抽象的な精神概念を具体的に表現することを可能と考えた。例えば、どんなことが起こっても、決して仲間を見捨てられない、ある場面で仲間は握手したり、笑顔で向き合い話したり、合い言葉を言ったりなどの演出で仲間の絆、友情や信頼を表現する。又は、敵討ち場面で登場人物は、敵の前に激怒な表情で叫ぶ、無慈悲なやり方で相手を斬る演出は恨み、憎悪を表現する。この様に映画は抽象的なことを具体的に表現できると考えられていた。武士道精神も抽象的な概念なので、映画のメディアを研究の

情報発信メディアとして取り上げる。

映画コンテンツにおいては、作品がよくリメイクされている。例えば、シェイクスピアの台本『ロミオとジュリエット』を題材として用いられ、リニューアルやストーリーの再創作などのリメイクの手法を使って幾度も映画化されている。日本映画においても、2000年以降、小林正樹が制作した『切腹』をはじめ、50年代後半から60年代前半に作られた多数の時代劇映画がリメイクされている。リメイク版が制作される理由としては、次のようなことが挙げられる。まず、原作自体が優れた普遍的な価値を持っていると考えられる。その価値を現代及び後世の人々にまで伝えたいと願う制作者もいる。次に、よく知られたストーリーは観客の興味を呼びやすく興行収入が上がりやすい。観客にとっては前作と比較するという楽しみもある。更に制作者にとっては、前作が作られた時代にはなかった映像技術を駆使したり、前作とは違う独自のアイディアを取り入れたりして、前作を超える作品を世に問うことができる。本研究は二本の『十三人の刺客』を取り上げオリジナル版とリメイク版を比較し、武士道精神の時代性の変遷や社会や人々の受け取り方がどう変わって来ているのかを映画での表現を通して考察する。

目的

一つの精神に対する考え方は時代によって変わる。つまり、個人だけでなく、組織や地域、及び社会において一つの精神概念に対する考え方が変わると考えた。映画制作者は、意識する、しないにかかわらずそれぞれの時代の社会事象や人々の考えを作品の中に反映させている。作品中の登場人物の台詞や行動、又は事件の発生や展開は、明示的又は暗示的手法でその時代について語っている。作者は自分の作品の中で、武士道精神に対する賛美及び批判を表現する。また、作者はその時代の社会状況や問題を他の方式で自分の考えを含めて表現する。即ち、それぞれの時代に作られた作品は、その時代を反映する重要な資料として捉えることができる。本研究では研究題材として、『十三人の刺客』を取り上げる。『十三人の刺客』は武士道精神の「忠誠」と「義勇」が重要なテーマであり、その精神性は時代による影響を受けていると思われる。1963年のオリジナル版と2010年のリメイク版を比較することによって、武士道精神の時代性の変容を考察することを目的としている。

Ⅱ　プロセス

Ⅱ－１　武士道精神の理解と整理

先ず、武士道精神について文章と論文を調べる。考察の方向は新渡戸稲造が論じた武士道を中心にリサーチする。次に、新渡戸稲造が論じた内容からキーワードを抽出し、武士道の思想概念をもっと理解し易くまとめる。さらに、明確にシーンを取り上げるため、武士道の思想概念から抽出したキーワードと関連性がある語彙を表（１）で示すように分類、整理す

る。

次に、七つの精神概念を対象によって分析する。図⑴で示すように、先ず、精神概念を自分に関するものと他人に関するものとに分ける。「義」と「勇」は自分の中に確固として存在する精神の表現で、「誉」は個人が求めている、栄誉や名声などのようなものである。他の「仁」、「礼」、「誠」、「忠」などの精神概念は他人に対する精神だけでなく、行為及び言葉の表現である。「忠」は主に目上の人、及びある組織に対する忠誠である。「仁」は同輩や後輩に対する情愛の表現である。「礼」と「誠」は、上下関係を問わず、他人に対応する時の自分の心の表現である。この七つの精神概念の重要度は人によって異なる。

Ⅱ－２　武士道精神について時代性の変遷

明治時代になり、廃刀令と士農工商の身分制度の廃止によって武士の時代は終わった。しかし武士道精神は深く日本人の心の中に残り、戦時においては軍国主義に大きな影響を与えた。第二次世界大戦後、憲法が制定され「サムライ」の思想は他の古い思想と一緒に忘れ去られたかのように思えた。しかし、今なお武士道精神は日本人の精神性に少なからぬ存在感を持っている。サラリーマンや様々な場面で公共の仕事場で働く人やスポーツ選手なども武士道の言葉で比喩する。仕事場の上下関係や勤め先の会社に対する忠誠心や礼儀作法などにも武士道精神が反映されていると言える。しかし、時代によって武士道精神に対する考え方が変わると考えた。1960年代に日本の高度経済成長期が始まる。大企業のサラリーマンは、職場教育の影響もあり昭和30年代（1955-1964年）まではまだサムライ的気分を持っていた。厳しい上下関係を基にしてサムライの世界のような仕事場の文化が形成された。そこではグループのリーダーが極めて重要であった。2000年代には情報量が爆発的に増え、伝達のスピードも加速した。欧米の個人主義の影響を受け、武士道精神に対する考え方も変わる。仕事場では効率や個人の能力やアイディアが求められる。上下関係も以前より曖昧になってきている。今の時代は、強力なグループのリーダーの存在よりも、チームワークや頭の柔軟さを求めている。

Ⅱ－３　映画における思想の表現

映画の中に各々のコマ、ショット、シーン、シーケンスの中に武士道精神を意味するものを取り上げる。一つの体系的な言語に解釈する。図（１）で示すようにメッツが述べる「言語活動」は音声的言語活動と非音声的言語活動及び技術的言語活動、芸術的表現（修飾語彙）に分けられる。事前調査の結果は、映画を比較することにより武士道精神についての考え方が時代によって変わることが分かるのではないかと考える。精神概念は文化の一部分であり、本体は変わらないが、違う時代に生きる人々の受け取り方が違うと考えられる。イデオロギーの表現の上で、異なる時代に制作された映画において武士道精神の表現に違いが見られるのではないかと考える。例として二本の『十三人の刺客』を取り上げ、武士道精神の

記号を意味するシーンを抽出し、変化が認められるところを比較する。

Ⅱ－４　作品の分析

『十三人の刺客』では、脚本家池上金男と工藤栄一監督の共同作業でストーリーが構成された。明石藩主松平斉韶暗殺の事件は、フィクションであるが、根本には徳川家斉の大御所時代が招いた弊害という史実は実際に存在する。史実に基づいたリアリズムで、権力闘争の結果として集団による乱闘劇がクライマックスに用意される要素をもって、集団抗争時代劇に分類される。オリジナル版はモノクロームだが、リメイク版の映像形式はカラーで、上映時間は、リメイク版はオリジナル版より16分程伸びている。制作映画会社は、オリジナル版は東映であるが、リメイク版は東宝である。

Ⅱ－５　オリジナル版とリメイク版の制作背景について

『十三人の刺客』のオリジナル版は1963年に封切られた。この時期は日本映画の第二黄金期の衰退期であった。景気の上昇により各家庭にテレビが普及し、映画産業が一気に不況になったのである。業界は混迷期にあったので、制作の予算と時間が制限され、元々の脚本が縮減され、上映時間は当初３時間近かったが、30分以上短縮された。各々の登場人物についての描写が減らされ、主要人物を集中的に描写する。いくつものエピソードを削減し、映像の繋がりをより緊密にせざるをえなかった。一方、リメイク版はナレーションやセリフにより説明を省き、観客が現代と江戸時代の距離感を持つようにする。キャスティングには、前作のキャスティングでは、強力なキャラクターイメージを持つ時代劇俳優を集めたため、人物の設定が制限された。一方リメイク版では自由なキャスティング設定で、登場人物の性格と特徴が鮮明に描写され、人物の設定は制限されない。なお、13人の刺客の集団は現代で言えば、テロリストのような存在である。藩主殺害の行動に観客の共感を得るため、松平斉韶の性格の描写は暴虐さが強調されている。脚本担当の天願大介は、武士道精神に疑問を抱いている。彼はインタビュー記事において侍という存在に対しての批評を行っている。彼のこの見解によって人物の設定とストーリーの終わり方が納得できる。

Ⅱ－６　映画における武士道精神の比較

人物の設定において、オリジナル版とリメイク版には相違があり、追加描写されている部分もある。表２で示すように整理した。例として藩主と木賀小弥太他３人の人物を取り上げ説明する。藩主の松平左兵衛督斉韶は、オリジナル版では暴虐な性格であるが、危険が迫ると小胆になる、典型的な小心者の悪役である。リメイク版の追加描写は性格が歪んだ、暴虐な人物である。また、藩主としての生活に退屈し、恐れを知らず刺激を求める一面を持つ。木賀小弥太のオリジナル版での人物描写は地味な郷士であるが、リメイク版では、山の民で武士の価値を認めない喧嘩好きな蛮人である。

Ⅱ－７　映画にみられる人間関係における武士道精神の比較

人物の人間関係について、オリジナル版は、上下関係がより明確である。鬼頭半兵衛は斉韶の下臣の一人であり、彼は殿の命令に忠実に従い、侍の義務を果たす。殿と侍の間には厳然とした距離が存在する。又、主人公、新左衛門は刺客のリーダーの立場にあり、団体の頭として、行動の策を決める。彼は落合宿の戦いでは暗殺軍団の参謀の様に隠れて、最後まで現れない。その時代の上下関係は厳しく、下の者は上司や目上の人に対する尊敬心を持ち、グループのメンバーよりリーダーの存在が極めて大きかった。

一方、リメイク版においても上下関係が存在するが、オリジナル版程明確ではない。斉韶と半兵衛の距離は近く、殿としての心情を部下の半兵衛に吐露する場面がある。新作の新左衛門はグループのリーダーであるが、早い段階から仲間と共に戦う姿が見られる。上下関係でつながっているというより、信頼関係でつながっていると言えるだろう。この違いは制作された時代の影響を受けていると思われる。つまり、1960年代では社会における上下関係が現代よりも明確であったことを反映していると考えられる。

Ⅱ－８　武士道精神に関するシーンの比較

二本の『十三人の刺客』における武士道精神の表現を具体的な例を取り上げて比較する。シーン中の登場人物の台詞と行動により武士道精神を意味する台詞を基準として抽出する。また、ショットの中の人物の構図（技術的な言語）を比較する。オリジナル版とリメイク版の武士道精神を表現する類似シーンを比較する。違う時代に作られた同じタイトルの映画を比較することによって、時代によって武士道精神の受け取り方に変化が見られる事を証明する。

シーンⅠは、斉韶と半兵衛の藩主と家来としての関係を描いている。オリジナル版の斉韶は半兵衛の助言を聞こうとしない、突然腹を立て、大声で罵る。リメイク版では、斉韶は罵倒するのではなく、「武士とは何か？…」と半兵衛に問い始める。殿が一方的に話すのではなく、対話が行われている。主従関係の変化が見られる。

シーンⅡでは二本の映像の構成に違いがある。オリジナル版は新左は先に斉韶を殺し、その後一騎討ちのシーンで半兵衛の刀を受ける。「これでよい、おぬしの殿を切らねば、わしの侍の一分がたたん、お主もわしを切らねば、侍の一分が立つまい。」の台詞で新左衛門の心中を表す。「義」を感じとれる。リメイク版では、新左衛門と半兵衛の一騎討ちシーンが先にあり、お互いの相容れない信条を表現している。半兵衛の命を尽くしても主を守る「忠誠心」と新左衛門の天下万民の為に藩主の命を取る「大義」、ここで忠と義の対立がよく現わされている。

Ⅱ－９　結論

二本の『十三人の刺客』に見られる武士道精神における表現に違いが認められる。50年の差があるリメイク版には人物設定の多様化が見られる。登場人物の武士道精神の受け取り方は様々であることが分かる。新左衛門のように英雄的人物像で、「大義」を持ち、天下万民の為に藩主松平斉韶の命を取ろうとする者がいれば、半兵衛のようにたとえ自分の殿が暴虐な主君であっても、侍として主に対する「忠誠」が揺るがない者もいる。又は、木賀小弥太のように侍のプライドや価値観などを認めない自由奔放な人物がいたりする等、リメイク版が人物を多彩、鮮明に描いていることは、近年の個人主義の影響であるのだ。

映画の類似シーンの比較結果を見ると、武士道精神を意味する台詞では、「忠」の精神概念を表現する上下関係に緩やかさが加わっていることが分かる。監督の撮影手法と編集効果によって類似的なシーンで伝えることに微妙な違いがあることが分かる。

Ⅲ　まとめと展望

約半世紀を隔てて、二本の『十三人の刺客』が作られた。二作品を比較すると、時代によって、武士道精神に対する考え方と表現方法が変わったことが分かる。武士道精神を大事にする人がいれば、個人主義の影響を受け、上下関係が薄くなり、あまり関心がない人もいる。そしてさらに半世紀後、武士道精神に対する考え方はまた変わるのではないかと考える。時代によって変遷する民族の精神に対する考え方は映画作品によく反映される。

本研究の考察結果は、監督や脚本家自身の見解が含まれている。一般外国人や外国文化の研究者にとって、言葉や文字だけでは上手く理解しにくい精神概念は、映画というメディアによって理解しやすくなる。武士道精神のような文化精神は、長い時間を経て形成された物である。武士道精神自体は文化の一部分として変わらないものであるが、時代の変遷につれて人々の受け取り方が変わってきている。さらに、20年、50年後の人にとって武士道精神の捉え方は又変わっていくのではないかと考えられる。

映画は多元的な芸術でその時代、時代の社会の有様を凝縮した資料であると捉えることができる。違う時代の作品を分析、比較すれば、文化精神についてのアーカイブ的な資料として活用できると考える。

［参考文献］

1　佐藤忠男『日本映画史　増補版Ⅲ（1960-2005）』岩波書店　2006年

2　ルイス・ジアネッティ著　堤和子・増田珠子・堤龍一郎訳『映画技法のリテラシーⅠ　映像の法則』フィルムアート社　2004年

3　ルイス・ジアネッティ著　堤和子・増田珠子・堤龍一郎訳『映画技法のリテラシーⅡ　物語とクリティック』フィルムアート社　2004年

4　中村隆英『昭和史（下）1945-89』東洋経済新聞社　2012年
5　工藤栄一　ダーティ工藤『光と影―映画監督工藤栄一』ワイズ出版　2002年
6　新渡戸稲造著　倉田眉貴子訳『今こそ読みたい　新訳武士道』幻冬舎ルネッサンス　2012年
7　『キネマ旬報　2010年９月下旬号』キネマ旬報社　2010年
8　国際交流基金（編）『国際交流（80)』国際交流基金　1998-2007年
9　アレキサンダー・ベネット『日本人の知らない武士道』文藝春秋　2013年
10　武光誠『日本人なら知っておきたい武士道』河出書房新社　2011年
11　新渡戸稲造著　PHP 研究所編・訳『武士道がよくわかる本』PHP 研究所　2007年
12　大石直紀『十三人の刺客　映画ノベライズ版』小学館文庫　2010年

表１　キーワードの整理

精神概念	重要キーワード	説明
忠	忠誠	自らを主、国、組織に捧げる心。
義	信念、決断力	自分の信じる正しい道。理想とも言える。
勇	勇気、大胆	どんな場面でも、信念を貫く精神力である。
仁	寛容、慈悲	人に対する情愛、優しい心。
礼	礼儀、教養	物事を実行する際の相応しい方法。
誠	誠実、信頼	言葉にした事は実行する。言行一致である
誉	名誉、堪忍	恥を知り、品位を保つ。

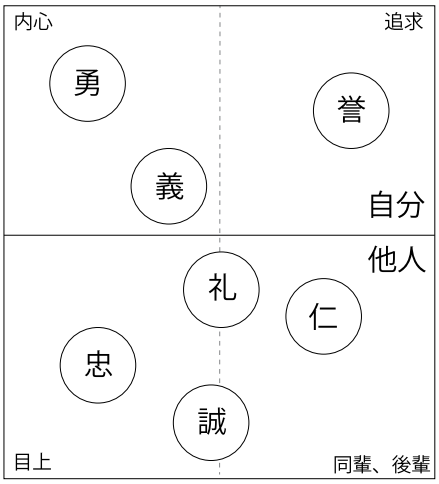

図１　七つの精神概念の対する場合における位置

表２　二本の『十三人の刺客』における人物設定の比較

人物名／バージョン	島田新左衛門	島田新六郎	平山九十郎	松平左兵衛督斉韶	木賀小弥太
オリジナル版	御書院番頭武士	高潔な武士	浪人武士	残虐な暴君	落合宿郷士
リメイク版	御書院番頭武士	だらしない武士	浪人武士	残虐な暴君	山の民
オリジナル版設定	大義をもつ。十三人の集団の頭。	武士の生き方に疑問を持ち、三味線に興味がある	刀を持ちすれば、無敵、刀が折れば力が失い。	暴虐な性格であるが、危険が迫ると小胆になる	地味な郷士である
リメイク版の追加描写	釣りが上手い、様々な兵法に通じる智者、大義を持つ武士。	博打と酒が好き。戦闘の胆力を持つ。	刀が折れても、石でも戦える。命を尽くして戦う。	残虐な性格だが、藩主として威厳を持ち、大胆な一面がある。	能天気な性格で、侍のプライドに対して批判的。